未成年

キューポラのある街／第2部／早船ちよ

未成年

早船ちよ／キューポラのある街／第2部

理論社

小説国民文庫

おなじ作者による理論社の本：

キューポラのある街（360円）
ポンのヒッチハイク（380円）
花どけい（360円）
山の呼ぶ声（360円）

作者の現住所：
埼玉県浦和市瀬ガ崎 326

未成年　キューポラのある街 第2部

ⓒ 1965年2月　第二刷
定価 380円
作者　早船ちよ
発行者　小宮山量平
東京都千代田区神田神保町一の64
発行所　株式会社 **理論社**
電話東京（291）5668-9
振替口座 東京 95736
印刷　加藤文明社
製本　橋本製本所
カラー　トラヤ印刷

未成年者は、
見るな
読むな
聞くな。
そして、
ものをいうな。
――！

もくじ

1 いちばん だいじなのは／5
2 ピョンヤンから／22
3 手に負えぬ十七才／31
4 考える十五才／45
5 もしもニセ札なら／62
6 手に負えぬ十五才／76
7 二つの顔／88
8 それよりもっと だいじなこと／101
9 市街戦／116
10 半ぱ人足ばかり／137

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

11　寝てると腹がへる／151
12　未成年といってほしくない／165
13　大人の陰謀／177
14　くさい怪文書／191
15　しごとに学ぶ／199
16　怒れる若ものの群／214
17　第三のグループ／222
18　赤い炎のように／241
19　水の炎／257
20　じぶんの場で／273
あとがき／295

そうてい・カット

久米宏一

1　いちばん　だいじなのは

リリリ、リ、リリ……。

四時半きっかりに、しごとじまいのブザーが鳴る。

リ・リ・リ、リリリ・ジー……。

大宮シルク工場の広い工場の構内の隅ずみにまで、その金属的な音はひびきわたって、余韻ものこさずに消えていく。

機械器具修理部の、ジュンの作業机の上は、そのときまでには、きちんと片づいていた。卓上ボール盤やグラインダーは、きれいに拭きこまれ、工具は工具棚へ、油布きんも所定の場所に、たたんでおかれる。窓ぎわの松葉ぼたんの鉢は、たっぷり、水をもらったばかりで、すがすがしい水玉を光らせている。

ジュンは、トイレへもいって、油で汚れた爪にブラッシをかけ、髪も梳いていた。

四時半以後のじぶんの時間へ、個人的なその生活時間へ、一分でも、勤務の範囲に属しているものごとが食いこまないように——それまでに、すっかり、しまいにしておくのだ。

終業のブザーが鳴りだしたら、まっさきに職場をとびだして、それが鳴り終わらないうちに、タイム・レコーダーのカードを押す。それから、食堂がひらくまでの十五分間を、ジュンは、どんなに貴重なものにしてきたことだろう。

自治寮二階の第三室に走ってかえると、まず作業衣をぬぎすてて、県立第一女高の制服にきかえる。紺の上衣にスカート、まっ白いブラウス姿を、柱鏡にうつしてみる。《脱皮》ということばを、ジュンはそのたびに思いだす。

ロッカーをあけて、ひるまの機械修理女工の脱けがらをきちんとしまい、数学の教科書や、英語のリーダー、製図用具をそろえて、通学用の手提げかばんへいれる。

このとき、ジュンは、完全に高校生になっている。中学を卒業してからすぐ、この大宮シルク工場へはいった。それから二年半になる。そのまに、労働者と学生という、二つの生活の切りかえが、自然にできるようになってきた。……そうだ。英語のリーダーの手ざわりだけで、労働の疲れさえもわすれ去っていくようだ。

——そうよ、あたい、定時制だからって、ノンコや、同窓生の誰にだって、勉強では負けたくないわ。

昼の高校生が二年生でマスターしてしまったこの英語のリーダーを、ジュンたち定時制の三年生は、まだぐずぐずと、やり終えないでいる。全日制が三年間にやる数冊の英語の教科書のうち、ジュンたち定時制は、四年間に三冊やればいいことになっている。——それを知ってから、ジュンは焦りだした。ジュンは自分も、グラマーの教科書と、全日制で補習する五、六冊のテキストをも併せてやろうと決心したのだ。

——そうよ、あたい。昼の高校へいっている磯貝せつ子にだって負けやしない。実力がないなんて、いわせないわよ。

もっといえば、北朝鮮の祖国へかえった金山ヨシエに対しても、しごとと勉強の両面で負けたく

ないのだ。
英語のリーダーのページを、ぱらぱらっとめくってみる。
——Mechanical……　Mechanism……
ふと、口をついて出た単語の意味のちがいが、ジュンをとまどわせた。
「機械的の——と、機械装置、あるいはその機構ということ。このちがいは、何だろう」
ジュンは、リーダーをひらいたまま、未知なものを、はじめて見出したような、おどろきの目を、そこに凝集させて、考えこんでしまう。
《メカニズム》——それは、ジュンたちが修理部で使っている、チャチなグラインダーや卓上センバン。そして、おやじの辰五郎の誇りたかい、たった一トン半のキューポラ。——ジュンの生まれ育った鋳物の街・川口の五百以上もある町工場のどこでも、お目にかかれるメカニズムである。
「それにしても、メカニズムって、いったい、なんだろう」

工場は、図体の大きいメカニズムだ。その機構のなかで、追いとばされるようにして、くるくる働き、くたくたに疲れ、時間と追っかけっこをしてくらす毎日毎日——
《ジャスト・イン・タイム》ということばを、工場長は口ぐせにいう。メカニズムも、材料も、人も、ぴたり、ある一点に集中して、しごとを進めていくやりかただ。
セリプレーンやデニールが安定した、一本の美しい生糸を繰り、生みだすために、動力のスイッチが正確に入ったとき、機械は、まえもって整備点検されてるから、するするっと停滞することなく動く。繰糸工場には、自動繰糸機にむかって、繰糸工が配置されている。その人の指は、一秒の狂いもなく、繰糸機の回転数にあわせて動く状態になっている。そこには、人間はいらない。指の技術が必要なだけ。働いている人間としての、人間らしい感情や、「おしっこしたい」生理なんかも、入りこむ余地がない。

「近代的な工場として、機械のオートメ化ばかりでなく、工程も、設備も、オートメ化されねばならんのだ」

工場長は、得意になってお説教する。

「大きな自動車会社を見学してきたがね。生産の合理化による、工場ぜんたいのオートメ化は、ウチより、ずっと、徹底しておった……」

——たくさんの下うけ業者からはいってくる、無数の部品が、きめられた時間に、きめられた場所へはこびこまれ、生産システムに組み入れられる。ジャスト・イン・タイム。一秒の狂いもない。それは、コンベアにのって、流れてくる品物の所定の部分へ、とりつけられる。工場には、材料置場や部品倉庫はいらなくなり、資材を管理する人手のムダもはぶけてくる。スペースと人手を、ぎりぎりに切りつめて、コスト・ダウンしていくのである。

「いや、見事なものだよ。わしは、すばらしいオーケストラのタクトを振る手を見た気がしたよ」

工場長は、ここ一年来、寝ても覚めても、《工程分析》や《作業分解》に、首ったけ、つかりこんで、夢中になっている。そのとばっちりを、直接うけて、ふりまわされるのは、現場事務所にいる前宮トモだ。

——かなわんわ。——ねえ、油、たんまり抜かれちまった。

へたりこんでも、ユーモアを失わない彼女は、青い顔をして目をくぼませていても、油の抜かれっぱなしというわけでもない。

人間はともあれ、八百万円以上もする自動繰糸機のメカニカルな動きにガタがくると、おいそれと、取っかえがきくわけではない。ジュンらの修理部の能力で、直せる限度も知れたもの。外部から入ってくる原料マユにもムラがあって、かならずしも、《ジャスト・イン・タイム》にのらない場合がある。

——キカイが不きげんだと、こっちは、ごきげんよ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

そんなときは、のうのうと、息がつけるのだ。寮の部屋の障子が、らんぼうにあいた。勢よく部屋へかけこんできた娘たちのひとりが、ぱっと、ジュンの肩へとびついた。

「ねえ、ねえってば、ジュン！　もし、今夜のおかず、カレー・シチューだったらどうする？」

同期に入った、繰糸部のサエ子である。

「ジュンはさっき、カレー・ライスだっていってたわね。だけど、カレー・シチューだって、カレー粉の匂い、するわけでしょ」

サエ子は、返事をしない、ジュンの顔をのぞきこんで、

「あら、ひどい！　きいてないの」

いきなり、平手で、ぴしゃんと、ジュンの手をひっぱたく。

「ひどいわぁ、ジュン……なんて、ガリ勉のガリガリ亡者なの。ふん、英語のリーダーなんか見せびらかしてさ。高校へいくからって何よ。たかが定時制のくせにさ」

ぴしゃんと、もひとつ、ジュンの手をたたくと、さっと、食堂の方へとんでいく。

「わぁっ！　痛た」

サエ子にとびついていって、なぐりとばしてやりたい。ジュンの怒り顔をみて、部屋の誰もが、わっはっは、あっはっは！　笑いだした。その笑いのなかには、

（サエ子のいうとおり）

（いい気味！）

（ジュンって、いつも生意気で、えらそうぶってるんだ）

そういう、それぞれの露骨な反感がこめられていた。

「わぁーん！　やられちゃったぁ。ビンタ、二つも食っちゃった」

ジュンは、べそをかいてみせた。

「ええじゃんか、ええじゃんか」

「夕めしまえの、オヤツになるわよ」

もはや、ジュンは、手の甲がまっかになったの

も、気にしていないふうで、学校行きの手提げかばんをとりあげる。
怒りをぶっつけられない口惜しさで、もやもやしている——その感情を表にださないだけである。(だしたら損だ。同情されるどころか、ひと一倍、反感を買うばかりだ)——そうした集団のなかで、この二カ年余を生きてきた打算とちえのようなものが、ジュンなりに身についてしまっている。
前宮トモは、部屋長らしく、とりなす。
「はははは。おサエなんて、がらっぱちなんだから、いちいち、気にかけなさんな。わたしらとおなじで、根はいい子なんだ」
彼女の人柄そのまま、明けすけの笑顔でそういってから、急に声をひそめた。
「ジュン……あのね、青婦部長が……」
「サユリさん?」
組合の青年婦人部長の岡田サユリなら、おなじ金町中学校出身の先輩で、やはり野田先生の教え子である。ジュンは、この大宮シルク工場へ就職のとき、世話になっている。
「そう、彼女があんたに、夏期闘争の打ち合わせの集会に出てくれないかってさ」
「ふうーん、サユリさんが……?」
「いいや、ほんとはね、組合からの要望で、そういってきた」
「サユリさんが、そういってたわけではないのね」
「まあね……でもね。彼女も、そういってないわけじゃないけど。……組合からの要望として、八時からの集会に、今夜はみんな出るように——ってね」
「八時ね。それまでに戻ってくるの、むずかしいわ……やっぱし」
ジュンは、そういって、首をかしげたまま、考えこむようすをする。
——じぶんたち夜間高校生なんか、あてにしないで、組合は、きめたことだけ知らしてくれればいい。反対はしないんだから。

ジュンは、この大宮シルク工場へ就職したとき、ここの修理部の女子工員であると同時に、ユニオン・ショップ制の組合の一員にもなったわけだった。しかし……組合員という自覚はあまりなかった。賃上げ要求も、年末闘争も、ジュンと直接かかわりのないところで、組合というものを代表した誰かが——それは、サユリやトモをもふくめて——やっていることだった。ジュンに、定時制高校があるように、彼女たちには組合がある。そういう感じでしかなかった。

「八時までには、ムリかねえ」

(知ってるくせに……)と、ジュンはうなずく。

今夜は、県立第一女高定時制の終業時間は、八時四十五分。クラブ活動のピンポン部に残らないとしても、寮へ帰ると、九時半はすぎるだろう。

「夏期手当て十二割は、みんな、どうしてもがんばらなきゃね」

トモは、いつもとちがって強引だった。ジュンの肩を、そのがっしりした腕でかかえこむように抱いて、ふたたび、いった。

「ね、あんたも、打ちあわせ会から顔をだしたほうがいいのよ」

「まかしとくわ、きめること。すまないけど」

「出てちょうだい！」

きっぱりと、命令するみたいな口調だ。

「みんなで統一行動をとるためにも、こん夜は、出てちょうだい。勉強は、あとからでも、あんたなら、取っかえしがつくでしょ」

「でも、……みんなに悪いけど、あたい……」

そういって、二カ年間、いつも、ことわりつづけてきた、かたくなな、思いつめた目いろだ。

定時制だと、授業を受けるときしか、自分の時間がなく、勉強の自由がない。ジュンは、批難の眼が、まわりじゅうから身につきささるのを、じっと耐えている。

「どうして、ジュン？」

「……」

「どうしても、だめ？」

「でも……でも、大学入試に、昼の高校生に負けたくないのよ」
おもわず、いってしまって、はっとした。いいたくなく、知られてはならないことだった。
トモは、眼をふせたジュンの肩に、手をおいた。
「ボーナス闘争は、ここんとこ、むずかしくなってねえ。みんなが、ジュンみたいに、任せておんぶでは、なかなか、かちとれそうもない情勢になってきているのでねえ……」
トモは、ひどくがっかりしたふうに、大きなため息をついた。
「この班の出欠は、わたしが責任をもっているんだよ。……頭へきちまうな」
「ごめんなさい、室長さん。……あたい、こんど、三年生になって、やっと勉強が何だか、わかりかけた気がするんです。……だから勉強したくて、勉強したくて……昼の高校へいってる子に負けない、何かそんなのとちがう勉強がしたいんです」
ジュンは、ちらっと腕時計をみた。
(四時五十分……ごはんをすまして、早く学校へ出かけなきゃ)
「ジュンの気もち、わかるけどさ。組合の立場も、よく考えてみてちょうだいよ。物価はぐんぐんあがる。賃銀は依然としてひくい。こんどの夏期闘争がかちとれなかったら、男の工員や世帯持ちに突きあげられて、こと重大なのよ」
「でも、どうせ、会社は承知するんでしょ。糸値が上っているようだし、会社の景気はわるくないんでしょ」
「会社は、何といってるか。あんた、知ってる?」
「いいえ」
「そうら」
トモは、ジュンの鼻を、ひとさし指でつっついて、はははーと、笑う。
「勉強もさることながら、あんたのような子が、じぶんのだいじな経済生活に、無関心ではいけないな——そう、サユリさんもいってたわ」
——いま、大宮シルクがつくっている生糸(きいと)製品

は、二十一デニール中心の、いわば太番手だから、原料マユをよけいにこなしたからといって、それがすぐ、会社のもうけにつながってこない。糸値がいい、といっても、それは敏感に原料高・原料難になって、はね返ってくるのだから、手放しで喜べない。——そう社長や現業長がいっている。だが、それはごまかしなのよ。

「……まぁ、学校が大事なら、いいからジュン、いっといで。今夜の集まりには、ジュンのぶんまで、がんばるわよ。学校からかえったら、会社のもようを聞かしてあげるね」

ジュンは、やっと解放された。食堂へとんでいった。いつもより二十分ちかくおそかったので、どうやって、メシを胃袋へ流しこんだか、覚えていなかった。猛スピードで、夕食をすませた。かけ足で、正門へとんでいきながら、ふと、トモのことばが、気持にひっかかった。

——じぶんのだいじな生活……じぶんのだいじな経済生活……。メカニカルとメカニズム。

「いってきまーす、おじさん」

外出の門鑑を投げるように渡して、正門をとびだす。

——もしかしたら、一時間めの音楽の授業に、おくれるかもしれない……。

ジュンたちの定時制高校では、一時間めは、音楽か体操か、ホーム・ルームの時間にあてている。一クラス五十人ぐらいの、四クラスで一学年。それが、四年の卒業期までには、半減して二クラス編成になっている。たいていの生徒が、昼は勤めをもって働いている。五時半の始業、かつかつに、かけつけられるのは、勤め先の条件がいいもので、半数以上は第一時限の終わるころ、おくれて教室にとびこんでくる。

バスの停留所へ、ジュンは、得意のかけ足で、すっとんでいく。バスと競争で、やっとかけつけた。バスは《満員》の札をかけていて、停車しないで、いってしまう。

（ちえっ、ついてないなあ。あと五分……つぎの

バスを待つ間だけ、音楽の時間、遅刻かもしれないわ)

ジュンは、このあたりに、やたらに工場や住宅が建って、いつもバスが混むのをふんがいした。しかし、よしんば、十分おくれたって、音楽なら、大目に見てもらえるのだった。

ぽんと、後ろから、肩をたたかれて、ふりかえった。

「ああら！　サエ子」

「さっきは、ごめんね、ジュン。あたい、すぐ、かあーっと、頭へきちゃうんだ」

「ひどいことといったわね。——あたい、すごくショックだった」

「気にしないで。——それよりか、だいじな話があって、追っかけてきたのよ。あんた、さっき、トモさんに何をいわれた？」

「……」

「ふふん、わかってるわ。組合の集まりへでろって、狙い討ちされたんだろ」

「あなたは？」

「でるもんか。でないほうがいいんよ」

「え？」

「そういうとこへ顔をだすと、あんた、労務からにらまれて、損をするわよ」

「夏期手当、十二割をがんばらなきゃ——って、室長さん、いってたわ」

「そりゃ、そう。出すものなら、もちろん、いただき、だわよ。だからって、上から睨まれてまで、やいやい騒ぐことはないわ」

「みんなしてやらなくちゃ——って、いってたわよ、室長さん」

「見ててごらん。かしこい人は、あんまり、目立つことをやらないから……。そいから、あたいたちは、働いて食っていかなきゃならないでしょ。そういう家庭の事情なのよ、ね。——そういう生活を、あたいたち、だいじにしないと」

ジュンは、びっくりしたように大きな目をみはって、サエ子を見返した。——働いて食う生活を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.